



# 日本双生児研究学会ニューズレター

井上英二先生追悼特別号《第49号》

Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2011年5月発行

## 目次

「鉄門いまむかし 一老書生のつぶやき」	井上 英二先生	2
井上英二先生のご逝去を悼んで	浅香 昭雄	6
井上先生を偲んで	天羽 幸子	7
井上英二先生を偲んで	安藤 寿康	9
井上英二先生の思い出	飯島 純夫	10
井上英二先生から最後に教えられたこと	飯田 眞	11
井上英二教授、1919-2010	今泉 洋子	13
井上英二先生を偲んで	大木 秀一	16
井上英二先生を偲んで	岡崎 祐士	17
井上英二先生の思い出	岡嶋 道夫	18
井上先生の偉大さを偲んで	加藤 則子	19
井上先生の思い出	黒木 良和	19
井上英二先生との出会い 《あたたかいホカホカ》をいただいて	小島 潤子	20
井上英二先生を偲んで	杉浦 祐子	21
50年あまり前の双生児研究合宿	詫摩 武俊	22
井上英二先生の思い出	竹下 達也	23
井上英二先生の思い出	徳永 勝士	24
井上英二先生の御逝去を悼む	早川 和生	24
井上英二先生を想う	日暮 眞	25
ふたごから学ぶこと	福島 昌子	26
車中歓談 — 思い出すことなど —	又吉 國男	27
井上英二先生 東大附属の双生児研究の源流	村石 幸正	28
井上英二先生を偲んで	横山 美江	29
井上英二先生のご逝去を悼む	吉田 啓治	29
編集後記	編集委員会	30

### 日本双生児研究学会

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-7

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

日本双生児研究学会事務局（早川和生）

TEL & FAX : 06-6879-2550

E-mail : hayakawa@sahs.med.osaka-u.ac.jp

## 「鉄門いまむかし」 一老書生のつぶやき

井上英二先生（昭17卒）

今の忙しい時代に、定年退官から30年も経った老書生の話などに耳を傾ける人がいるだろうか、と半ば訝りながら、求めに応じて略歴から。

大正8年、開業医の末っ子として東京に生まれた。父・達二と祖父・達也は眼科医だった。3歳で関東大震災。小学校は桑畑や櫛林に囲まれた郊外ののんきな学校だったが、時代を映して、イザナギノミコトやヤマトタケルノミコトの話ばかりする先生もいた。7年制の武蔵高校へ進学、昭和天皇の侍医だった高木顕先生や、後の総理・宮澤喜一先生が同級だった。尋常科4年を終えて高等科に進んでからは、学問の楽しさを存分に味わうことができた。他人の真似が大嫌いで、教練が一番嫌いな学課だった。

昭和14年、医学部入学。教練も初めは日露戦争の話聞くだけで済んだが、学問をしようと期待した肝腎の医学部の授業は、殆どが丸暗記か、あまり上手でない発音のドイツ語の名詞と動詞をテニヲハで結んだ講義ばかりで、正直裏切られた気がした。大学の授業より立見の歌舞伎、絵画展、読書、音楽、写真、撞球、スキー、山歩きに打ち込んだ。

昭和14年入学のクラスはもっとも多くの戦死者を出したクラスである。3年のときに真珠湾攻撃が始まり、17年の9月には卒業試験もそこそこに、6ヶ月繰り上げて卒業させられた。進路の自由な選択はなかった。二等兵としてこき使われるよりはましだろうと、病人以外の級友はほとんどが軍医を志願した。大槻菊男先生（大2卒）が最後の臨床講義で涙とともに「学問は何処にいてもできるものである」と云われたそのお姿は、今でも眼前に彷彿とする。卒業謝恩会で一同「海行かば」を歌って別れて以来、二度と会えなくなった級友達の思い出は尽きることがない。

われわれは消耗品であることを自覚せざるを得なかった。いくらかは楽だろうとたかを括っていた海軍も甘くはなかった。苛酷な訓練を終えて軍医中尉に任官し、小さな軍艦の乗り組みなどを経て赴任した航空隊では、東大の先輩の軍医大尉が威丈高に「井上は僻地勤務だな」と私を硫黄島に追いやろうとした。それを拒否してくれた命の恩人も東大先輩の軍医少佐だった。ここは戦争の経験を語る所ではないが、長崎の被爆者達の、一切の感情を失った幽鬼のような列を目前にした時ほど、医学と人間の無力を知らされたことはない。

戦争が終わり東大精神病学教室に復帰した。精神科の病室はすべて閉鎖病棟で、付き添いの家族も見舞客も、鍵を持っている看護婦か医局員が入り口の戸のロックを外すまで、廊下で待ちぼうけを喰わされた。業を煮やしたさる著名な作家が「官僚的だ」と医局に怒鳴り込んで来たこともある。食事時には付き添い達が病室の廊下に七輪を持ち出して、団

扇でバタバタやりながら魚を焼いた。今の人たちにこの光景が想像できるだろうか。外来は活況を呈し、中でも進行麻痺患者が多く、財閥解体や農地解放で没落した嘗ての財界人や大地主の鬱病、新進作家の薬物中毒が病室を埋めた。統合失調症そっくりの精神症状を示すヒロポン中毒患者も多かった。

診療のかたわら始めたのがふたご研究で、これがライフワークにつながるとは思ってもみななかった。「専門は何ですか」と云う質問には「ヒトの行動遺伝学」と答えると変な顔をされるので、精神医学と人類遺伝学だと云うことにしている。以下人類遺伝学の変遷を中心に来し方を辿ってみよう。

ふたご研究はヒトの個体差に寄与する遺伝と環境の分析が目的である。最初は正常性格のふたご研究から始めたが、記述を主とする性格研究にはあきたらなかった。10年以上を要したが優秀な共同研究者の協力もあって、今では再現可能な数値化できるヒトの遺伝的行動特徴を見出したと思っている（興味のある方は E.Inouye, *Genetic Basis of Human Behavior, Folia Psychiatrica et Neurologica Japonica* 18, 183-192, 1964 をご覧頂きたい。これはハワイでの日米科学協力で発表したものである）。

一卵性のふたごは様々な形質が驚く程類似しており、同時に微妙な違いが観察される。環境も遺伝もその関与が大きいことを知らされ、研究の重点は次第に遺伝に移っていった。研究の拠点は脳研究所で、ここでは昭和12年の開設以来、心理学部門で遺伝の研究が進められていた。われわれの対象はてんかん、神経症、統合失調症のふたご研究に広がっていった。外国の類似の研究の中には症例を見ないで病歴だけで分析したものもあった。われわれはすべての症例とふたごの相手に面接するため全国を旅行して歩いた。その成果の一つは、一卵性の統合失調症の発端者の相手に、病院ではまったく見ることができず、教科書にも記載がない奇妙な異常人格でありながら、ほぼ正常な社会生活を送っている人が少なからず存在することを知ったことであった。症例とその相手はすべて経過を追跡したが、数十年に亘って追跡した一卵性の統合失調症のふたごの相手に、異常人格でありながら、長年にわたって症状を発現しない場合が少なからずあることを知った。また研究費は乏しく高価な抗血清は使えないから、一卵性か二卵性かを診断する安あがりな正確な診断法を作るのも一つの仕事であった。

昭和23年から始めたのが、教育学部附属学校でのふたご研究との協力である。この研究では、一定年齢の無選択な正常サンプルが得られるから、学内、学外の多くの研究者に機会を提供し共同研究が活発に行われた。沖中重雄先生（昭3卒）、藤田恒太郎先生（昭3卒）は熱心な共同研究者であった。しかしこの時代はまだ、ヒトの遺伝に対する関心は低かった。遺伝はタブーだったのである。

昭和35年にアメリカの大学で講義をする機会があった。人類遺伝学研究者を片端から訪問して歩いたが、ここでもまだ萌芽時代で、Cold Spring Harbor Symposium できえ、遺伝子はタンパク質だろうという議論が優勢だった。Watson-Crick の DNA モデルがすでに2年前に発表されていたにも拘らず、である。昭和36年に東京で遺伝学シンポジアが

開催された機会に、古畑種基先生（大 5 卒）を会長に推して日本人類遺伝学会を創立し、機関誌の人類遺伝学雑誌（現在の Journal of Human Genetics）を創刊した。その Chief Editor と三代目に引き受けた学会会長職も、重責ではあったがよい経験になった。

先を急ごう。昭和 34 年に順天堂大学から脳研に復帰した。脳研では吉益脩夫教授（大 13 卒）が人類遺伝学と犯罪精神医学の研究を進められており、私が遺伝の研究を担当することになったのである。精神科の診療とは縁を切ったが、間もなく病因不明だった Down 症候群の染色体異常などが発見され、ヒトの細胞遺伝学が急速に発展した。われわれは主に性染色体異常（XXX、XXY、XYY 症候群など）の異常行動について研究したが、それぞれ特異な精神障害および犯罪との関連が示唆された。駒場の理科三類の二学期に、必修の人類遺伝学の講義を始めたのは昭和 41 年である。この頃から、人類遺伝学は実験のできない個体や集団の観察から、細胞を扱う実験科学に発展した。遺伝学の基礎ともいべき染色体地図も例によってアメリカが大きくリードしたが、その基礎には阪大の岡田善雄教授など、日本人の貢献が大きいことも忘れてはならない。

研究所にいたからと云って研究ばかりしていた訳ではない。昭和 37 年に教授になってからは色々な役目が回って来た。医学図書館長るとき、緒方富雄名誉教授（大 15 卒）のご下命で「ヒポクラテスの木」の一本を図書館玄関脇に植えたのもその一つである。対外的にも中央官庁との様々な仕事のほか、WHO や国際学会などとの協力が多かったが、ここで一々記載する余地はない。研究から遠ざからざるを得なかったのは紛争の時で、一番閉口したのは、特異な論理の演説に耳をそばだてていたせいか、暫くは英文の論文が書けなくなったことである。

昭和 55 年に定年退官した。分子生物学がヒトに応用されるようになったのが丁度このころで、私は「古典遺伝学」の最後の人間と云ってよい。国費を使ったふたごのデータはすべて大学に残して来た。幾つかの未完の研究課題もあり、新たな計画もあったが、退官後は自分の研究に集中することはできなかった。愛知県の発達障害研究所長を経て学術会議の会員となり、「ヒトゲノムプロジェクトの推進」を総理大臣に勧告したが、政府が手間取っているうちに、例によってアメリカに遥かに遅れをとる結果となったのは残念であった。国際機関の CIOMS と共同で、ヒトの遺伝子治療の対象は体細胞に限るよう宣言したのも学術会議のときであった。

最近心不全のため ICU、永井良三教授（昭 49 卒）と循環器内科にお世話になっている。施設と医療技術の改善や進歩は云うまでもないが、昔の附属病院と比べて最も印象深いのは、医師や看護師らスタッフの自然な態度である。有名人に怒鳴り込まれることもないだろうし、「今の若い者は」の繰り返しの出番もなくなった。この紙面を借りて感謝の意を表するとともに、東大医学部の更なる発展を大いに楽しみにしていることを記して執筆の責めを塞ぎたい。

- 鉄門だより - （第 6 6 1 号）（平成 2 1 年 1 2 月 1 0 日発行）より転載



2009年5月24日、南国酒家で開催された「井上英二先生を囲む会」のお写真と、井上先生からの5月27日付けのお礼の手紙（杉浦祐子さん宛）を紹介します。会は、結局サプライズの会となり、卒寿をお祝いする会となった。（浅香昭雄記）

「皆さんの暖かいお心遣いは、思いがけず、身に余る喜びでした。久方ぶりにお会いした皆さんの明るいお顔を見られただけで、眠りこけていた脳と身体に覚醒のきっかけを与えられただけでなく、お一人お一人の思い出や感想、現在のご活躍のお話は新鮮で、刺激的、平凡な毎日を過ごしている老翁にとって birthday cake や Godiva のチョコとともに、早天に慈悲を注がれた感を深くします。年を取るということは、辛い体験を重ねるだけでなく、喜びを受ける特権を与えられることだと痛感した次第です。重ねて御礼を申し上げ、皆さんの一層のご多幸を祈り上げます。」



## 井上英二先生のご逝去を悼んで

浅香 昭雄 (名誉会員)

平成 22 年 (2010 年) 10 月 17 日、井上英二先生はこの世を去った。享年 90 歳。1 年位前より、循環器の調子が思わしくなく、東大病院に通院されていたが、最終的には腎不全を病まれ、同病院にての 3 週間の入院の後、逝去された由である。人類遺伝学または精神医学の領域で、まさに巨星墜つとの印象であった。奇しくも、その日は井上英二先生の奥様が 20 年前にお亡くなりになった命日と一致した、その日であった。先生には 2 人のお嬢様がいらっしゃるが、そのご長女は、父はその日を密かに狙っていたに違いありません、と強調されていたが、奇跡が起こったというべきである。

先生は、大正 8 年(1919 年)12 月 15 日、高名な眼科医を輩出した家庭の末っ子として、東京に出生。旧制武蔵高校を経て、東京帝国大学医学部に昭和 14 年に入学された。その時分、世はすでに風雲急を告げていた。昭和 16 年 12 月 8 日の第二次世界大戦の勃発である。先生達の学年は、半年卒業を早めることを余儀なくされ、昭和 17 年 9 月に卒業された。卒業謝恩会で、「海行かば」を歌って同級生と別れたということである。私どもの世代は、この軍歌を実際に歌ったことはないが、耳には強く残って、高校の同級生と会うとき、これを「反戦歌」として歌ったことはある。ご卒業後は、選択の余地無く、軍医となられた。すんでのところ、玉砕の島、硫黄島に送られるところであつたらしい。また、機関銃掃射に見舞われる中、逃げまどう経験もあつたという。先生の同級生の半数以上が戦死しており、医学部 150 年の歴史のなかで、最大の犠牲者数である。

終戦の後、東大の内村祐之教授の主宰する精神医学教室に復帰された。最初の論文は、「双生児法による性格研究」(昭和 28 年)であり、これが学位論文となった。また、これがきっかけとなって、先生のライフワークとしての双生児研究が始まった。精神医学分野での双生児研究は、てんかん、神経症、統合失調症などで、多くの業績を発表された。

先生の最大の功績は、日本双生児研究学会を創設され、その会長(昭和 62 年—平成 4 年)を務められ、平成 4 年には国際双生児研究学会を東京に招致したことである。日本人類遺伝学会の理事長(昭和 52 年から 62 年)をなさったことと並んで、後世に残る貢献をされた。

昭和 37 年、脳研究施設の教授になられた。この頃、笠松章教授の主宰する東大分院神経科の大学院生となった私は、同教授の紹介で、井上先生に預けられたのが井上先生との邂逅である。当時、台頭してきた細胞遺伝学を精神医学分野に応用することを命ぜられた。クラインフェルター症候群の性染色体異常は発見されたばかりであつた。「クラインフェルター症候群の精神医学的研究」なるテーマを与えられ、その朱に染まる添削の草稿が先生との間で何回往復があつたことか、懐かしい思い出である。それ以降は、自然に双生児

研究に携わることになった。内村祐之先生が昭和 23 年に創立された教育学部付属学校に入学する双生児の卵性診断は、井上先生もことのほか熱心で、その態度は鬼気迫る感があったのを覚えている。そこの在學生、卒業生の協力を戴いた研究成果も見過ごすことはできない。幸い、現在は、徳永勝士教授や大木秀一君が後を引き継いでやってくれていることは喜びに堪えない。

スエーデンの Essen-Möller 教授 (1901-1992) と個人的にも親交を結んでいらしたこともあり、卵性診断における一卵性である確率を「Essen-Möller の式による卵性診断の確率」として熱心に紹介しておられた。ある時これは Bayes の定理 (1763) を応用した式に過ぎないと申し上げたら、かなり憤然とされホットな議論をした覚えがある。その詳細な顛末は忘れてしまっていたが、ある時日本双生児研究学会の創立記念総会における井上先生の特別講演「日本における双生児研究の歴史」の印刷物を見たとき、「Bayes の定理による Essen-Möller の式」と、ちゃっかり書かれているのを確認した。井上先生らしい、と苦笑したが、それも昔々の話である。

最近、たまたま Virginia Institute for Psychiatric and Behavioral Genetics への留学生氏のブログをみつけ、その留学生氏が井上英二先生の訃報を知って驚く場面が出てくる。それは、彼のボスから教えられたことが分かるのである。双子研究もされていることも書かれている。彼は、井上先生のほぼ 50 年の後輩に当たるひとである。

その日 (平成 22 年 10 月 17 日) の夕刻、何気なくゴルフの放映を観ていたが、そのゴルフ場の、先生とは叔父・甥の関係に当たる、設計者の名前がしばし報じられ、何かの予感を感じとっていた。その時間帯に先生はまさに幽冥境を異にしていらしたのであった。かなり晩年の頃、何時、何処か、はすっかり忘れ去っているが、覚えている言葉は「まだ、我孫子に行っているんだよ、浅香君」というものであった。ご高齢になっても、ゴルフをされていることを知り、お元気であると思ったことである。

謹んで先生のご冥福をお祈りする次第である。

## 井上先生を偲んで

天羽 幸子 (ツインマザーズクラブ)

井上先生にはじめてお目にかかったのは、東大附属の入学希望者を対象にした双生児検査の折だった。その頃の検査は、東大の三四郎池の上にある山上会議所で行われていた。卵性診断のもとになる類似診断は、井上先生を中心に大忙しであった。

私がかかわったのは、昭和 27 年からで志願者は急増していた。多分 50 組近くのふたご

と父兄も参加してもらったように思う。

脳研究所、内科、法医学、人類学、歯科、解剖学、心理学等と検査に関係する領域は多く、その人々を井上先生は、きっちりとまとめ、東大附属の先生方とも友好的に行われた。

大学を卒業したての私は、井上先生が 20 歳以上年長だとずっと信じていた。本当は、当時先生は、30 代前半だった筈である。

その後、先生のリーダーシップは、1992 年の第 7 回国際双生児研究会議を東京で開催する準備委員会で発揮された。国際会議を引き受けるには、このような過程をふむのかと先生のすぐ脇で卓越した語学力と詳細な企画力に毎回圧倒されながら勉強させていただいた。

公の場での井上先生は、強いリーダーシップに象徴されるが、その他の面ではきびしいと感じることなく、いろいろとお世話になった。

ふたご研究は、中学校からの東大附属の生徒ばかりでなく、乳幼児からの縦断的追跡が必要であると考えて東大から離れた。

その 3 年後、偶然私がふたごの母さんになった。その観察記録を読んだ NHK から是非息子を対象にドキュメンタリーをとらせてほしいと申し込まれた。その折 NHK としては、一卵性であると確認するため 卵性診断をしてほしいとのことで、井上先生にお願いすることになった。

2 歳 6 カ月の息子たちは人見知りもせず、先生の研究室中をとびはねた。

こんな小さい人の卵性診断なんてしたことはないとおっしゃりながら、文字通り汗びっしょりになられて、息子たちを一卵性であると判定していただいたのである。

昨年 5 月、しばらくお目にかからなかった先生の 90 歳をお祝いする会をしてはどうかと思いついた。今泉先生にご相談し、国際会議の準備委員だった先生方を中心に集まっていた。当日私は原宿駅の改札口までお迎えに行った。先生は 5 メートルくらい手前からさっと手をあげて、いつものダンディなお姿で足どり軽くいらっしやった。

会場までのわずかな時間に「嬉しいねえ」とおっしゃったお言葉は今でも耳もとに残っている。私の父も学者だったせいか、私にとって先生はいつもお父さんの感覚で、11 歳の年齢差ではなかった。

ささやかな小宴だったのにあのように喜んでいただけるなら、来年も先生を囲む会をしようと思っていたところ、突然のご逝去の報に呆然としている。

しかしいかにも井上先生らしく「さらばじゃ」と手をあげていかれたような気がして、私もあやかりたい気持である。

長い間、双生児研究の灯りをともし続けていただいて、本当にありがとうございました。



## 井上英二先生を偲んで

安藤 寿康（慶應義塾大学文学部・ふたご行動発達研究センター）

はなはだ粗雑な二分法であることは承知の上のことだが、私は人間と人間の作るモノはホンモノかニセモノのいずれかに分けられると思っている。ヒトが作るこの世界の圧倒的多くはニセモノだが、その中にごく限られたホンモノがある。ホンモノを見抜くことがきわめて重要であり、そしてなによりも自らがホンモノでなければならない。科学という営みは、本来ホンモノしかその存在を許されないはずだ。若いとき、そう信じて学問の道に入った。だが実際その世界に入ってみると、やはりまわりにニセモノが多いことを知った。そしていつか我が身をふり返れば、かくいう自分自身こそがホンモノではなかったことにいやというほど気づかされるのだ。私にとって、それを気づかせてくれる存在が井上先生であった。

井上先生を知る誰もが感じることであろうが、井上先生の姿を見ると自ずと身が引き締まる。背筋を正さずにはいられなくなる。ウソは通じない。こちらがニセモノであることはすぐに見透かされてしまう。だからとても怖い。この怖さはホンモノの光の前に自分のもつ甘さやいい加減さが作る影が、自らの皮膚の上にくっきりと浮かび上がってしまう怖さである。それは自らが作る影であるから、逃げて隠れてもそれはついて回る。それに気づいてしまった以上、非力を覚悟で立ち向かうしかなくなる。

私が2004年に科学技術振興機構(JST)の「脳科学と教育」というプログラムの研究資金を得て、同じ双生児研究者仲間と大規模な双生児コホート研究プロジェクトを開始することになったとき、「井上先生詣」を挙行了。共同研究者の加藤則子先生と、本駒込のご自宅にそのご報告にうかがったのである。それはまさに「詣」という表現にふさわしい営みであり、身を清め、背筋を正しての訪問だった。井上先生のみからみて「きちんと」したものを作らねばならないという思いからだった。

「いまはおさんどんをしていますよ…」とおっしゃりながら、とても日常的な雰囲気を出迎えてくださったその姿は、しかしやはり矍鑠としていた。男の私が言うのも何だが、なんでこの先生はこの年齢でこんなに「セクシー」なんだろうと、いつもながらに思った。本当はもっと別の言葉を用いるべき不適切な表現なのだろうが、やはりこの言葉がいちばんしっくり来るのが不思議である。セクシーさというのは明らかに生理的なもので、それこそがホンモノの持つ魅力なのだろう。これは実際、どのような職業の人であれ、とりわけ日本人に対していただくことはほとんど無い感覚だ。年齢を超え国籍を超えて、生命の内側から沸き立ってくる魅力である。それを井上先生はお持ちだった。

井上先生のようなかたがわが国の双生児研究の先達をされていたから、私はいまも迷いなく双生児研究を続けていられる。このようなホンモノでセクシーな人物が生涯を通じて打

ち込んでこられたことがホンモノでないはずはないからだ。

井上先生の生前のご薫陶に感謝し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

## 井上英二先生の思い出

飯島 純夫（山梨大学大学院医学工学総合研究部）

井上先生と初めてお会いしたのは、私が東京大学医学部保健学科の学生であった昭和 45 年頃のことであったと思います。当時井上先生は保健学科と同じ医学部 3 号館の 6 階の医学部附属脳研究施設心理学部門の教授をされていて、保健学科では『人類遺伝学』を担当されていました。当時私はボート部員で、埼玉県の戸田漕艇場で毎日早朝 5 時から 7 時ころまで練習してから、バスと電車を乗り継いで大学に通っていました。できるだけ授業には出席しようという気持ちはあったのですが、練習の疲れ等で図書館などで仮眠をとることも多かった中で、井上先生の授業には毎回必ず出席していました。それは先生の授業がとても興味深かったためです。授業では、人類遺伝学の基本事項とともに、先生のご専門である『双生児と精神疾患』に関する研究のお話をうかがうことができました。その授業の中で特に印象深かったこととして、「遺伝相談に来た精神疾患の患者さん同士のカップルに『お子さんを生んだ場合に、このくらいの確率で同じ病気になる可能性があります。』と伝えた時に、その 2 人が『もしも生まれてきた子が病気になったとしても 2 人で一生懸命育てます。』と答えたことに、私はとても立派だと思いました。」と先生が言われたことです。またその授業の中で、先生が元々は精神科の臨床をされていたのに、人類遺伝学という研究の道に進まれたのは、臨床で患者さんに対症療法的に治療をしても限界があり、研究で原因を究明して、より多くの人たちの予防なり治療に役立てたいと感じたためであるというようなことを言われていたのにも感銘を受けました。このように、井上先生が病者に対する温かい心をお持ちであることは学生の私にも直に伝わり、尊敬の念を禁じ得ませんでした。保健学の大学院の修士課程にすすんでからも、井上先生の『人類遺伝学特論』を取り、ゼミで内容が難解な英文の論文を私が選んで、内容もよく消化できないまま発表した時に、先生に「遺伝学の中でも数学的な手法を扱ったものはとても難しいんです。」というようなことを言われたこともよく覚えています。一方で、井上先生は学生の間ではダンディーで有名であり、当時すでに 60 歳少し前の定年に近いお年であったにもかかわらず、颯爽とした姿で歩かれていたのを思い出します。

その十数年後、私は新設の山梨医科大学の保健学Ⅱ講座（現社会医学講座）の日暮眞先生の下に講師で赴任し、またさらにその数年後に日暮先生が東京大学に移られた後に、後

任で来られた浅香昭雄先生の代理のような形で、井上先生が国際双生児研究学会の大会長として東京で国際学会を主催されたときに、実行委員としてお手伝いをさせていただきました。その後、学会等でお会いする先生は、ひげを少し伸ばされて、存在感がますます増され、声をかけていただくたびに温かい気持ちになったものでした。最後になりましたが、井上英二先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

## 井上英二先生から最後に教えられたこと

### 飯田 眞（名誉会員）

井上先生が亡くなられたことは本当に悲しいことです。亡くなられて1ヵ月余りが過ぎましたが先生の死をまだ受け入れることができません。

去る10月14日、突然、井上先生のお嬢さんの桃子さんから電話があり、先生が入院されていて、体調が思わしくなく、私に会いたいと仰っているというお話しでした。翌日、東大病院の循環器内科に入院されている先生をお見舞いに行かれました。桃子さんのお話では、腎機能のデータが悪いので主治医から透析治療を薦められているのに先生はお受けになりたがらないので困っているとのことでした。先生にお会いすると、昔私が接していた頃の先生と余り変わらず、お元気そうにお見受けしましたが、「飯田君、私はもう生きるのに疲れたんだよ」としんみりと語られました。先生にはすでに死を受容し、超越しておられる心境が感じられました。お会いする前には透析を受けて一日でも長く生き続けてくださいとお願いするつもりでしたが、この言葉はもはや意味を失っているように思われました。

桃子さんから尋ねられるままに、私の娘の話から孫の話へと他愛ない近況をお話して時間を費やして、少しでも先生に命を永らえて頂きたいという弟子としての私の願いを申しあげぬまま帰ってしまいました。それが先生との最後のお別れになったことが残念に思われてなりません。

先生のお元気そうなお姿を拝見し安心して帰ってきたので、それから四日後に先生ご逝去の電話を頂いた時にはショックを受けました。先生が亡くなられたのだという実感が迫り、悲しみに襲われました。私は先生の最期にお会いでき、死を超越しておられる精神の高みに接して、先生は亡くなられる時も私の先生であり、死の迎え方を私に教えて下さったように思いました。

昨年春先生の学恩への感謝をしたためた一文（「私の恩師 井上英二先生」）を弔辞としてご霊前に捧げ、ご冥福を心からお祈り申し上げます。（2010.11.22）

## 私の恩師 井上英二先生

私には恩師とよぶべき先生が何人かおられる。東京大学精神科の主任教授であった内村祐之先生、大学院では脳研究所の井上英二先生、東京大学分院に移ってからは躁うつ病の精神病理、病跡学研究への道を拓いていただいた笠松章先生、精神療法の実際を学ばせていただいた聖路加病院の土居健郎先生、ドイツ留学で発病状況論という新しいパースペクティブを示してくださった F. Mauz、B. Pauleikhoff 両先生である。

そのなかでも私が最も影響を受け、精神科医の原型がつけられたのは井上先生に師事した時代で

あったと思う。1961年に東京大学精神科に入局後、内村先生に研究のことで相談に伺い、漠然と精神病理学と病跡学をやりたいとお話したところ、「病跡学は趣味としてやりなさい。精神病理は臨床と同じことだから、井上君のところで双子の研究をやりたまえ」ということになり、脳研究所の井上先生のところに弟子入りすることになった。あとからわかったことだが、内村先生は精神分析がお嫌い、神経症を正統的な方法(双生児法)で研究することを私に期待しておられたのである。内村先生は後に1983年に開催された日米学会で、私の研究成果を引用してくださった。

双生児研究はフィールドワークで、資料を集めるために、北は東北から南は九州まで、人類学的類似診断に必要なカメラや、採血、指紋採取に必要な道具などをたずさえながら井上先生と研究旅行に従事し、卵性診断と精神医学的面接の実際について懇切で厳格な指導を受けた。とりわけ病像の正確な記述の重要性を指摘されたことが忘れられない。発端者の方の面接は医療機関の方がたのご好意で本人の納得がいただきやすかったが、健康な相手の方には双生児研究の精神科臨床への寄与を説明して研究への同意をお願いした。自宅を訪問しても断られることもあったが、幸い多くは当方の真摯さと熱意が伝わって同意が得られ、研究に十分な資料を集めることができた。

資料は集めたものの、井上先生の論文指導はさらに厳密で、初めてヒステリーの双生児の症例報告を書いたときには、赤字で元の原稿の見えぬほど先生の訂正が入っていた。それを何度か繰り返し、E. Slater の症例報告や E. Kretschmer のヒステリー論を参照してやっと最初の論文ができあがったことを記憶している。当時はワープロもなく、手書きの原稿を何度も書き直すのは大変な作業であった。つぎの症例報告は強迫神経症の双生児であったが、H. Luxenburger の古典的な報告や、Kretschmer の医学的心理学や双生児の性格研究の層構造論に依拠してやっとまとめることができた。この論文は前回よりも先生の赤字が減り、少しは進歩したかと嬉しく思った。

このようにして全 20 症例を分析し、遺伝因、環境因、社会因などの働きから新しい多次元的な神経症分類を提示することができた[最終的な私の神経症の分類については『岩波講座精神の科学 1』(岩波書店、1983)を参照]。これは従来の神経症概念に疑念を投げかけたものである。今日、DSM-III の登場で神経症概念が解体したが、私は 40 年以上前に似たような試みを行っていたことになる。また心因の多様性を解明したことも、心因論への大きな寄与であったと思う。

私の処女論文(精神神経学雑誌 1962)は、恩師である井上先生の、症例報告から学術論文の構成に至るまでの細心なご指導の賜物である。その後、研究領域は広がったものの、双生児研究は縦糸のように私の研究を貫いている。私の最後の学術論文は「双生児研究からみた躁うつ病の発症モデル」となった(臨床精神医学 2003)。後年、若い精神科医を育成する立場に置かれたとき、臨床教育、論文指導に自信をもって臨むことができたのも、ひとえに井上先生のお陰と感謝している。

(Bulletin of Depression and Anxiety Disorders, 7 巻 1 号、pp. 9, 2009.より転載)

## 井上英二教授、1919–2010

今泉 洋子 (大阪大学大学院医学系研究科)

### Obituary

### Professor Eiji Inouye, 1919–2010

Yoko Imaizumi (Invited Professor, Graduate School of Medicine, Osaka University)



It was with great sadness that we learned of the passing on October 17, 2010, of our esteemed friend, Professor Eiji Inouye, from secondary renal failure after a three-week hospitalization in Tokyo. He was 90 years old.

Professor Eiji Inouye was born in Tokyo in 1919. His father, Tatsuji, as well as his grandfather, Tatsuya, was an ophthalmologist. Together with his wife, Kazuko, Eiji had two daughters and two grandsons. He obtained his MD in 1942 from the University of Tokyo, and his first duties were those of an army surgeon. In 1945, he turned to the Department of Psychiatry at the University of Tokyo, and began his career in twin studies in 1948. In 1953, he obtained his Doctorate of Medicine from the University of Tokyo. His thesis was titled 'A Study on Personality by the Twin Study Method'. In 1962, he became a professor at the Institute of Brain Research at the University of Tokyo. He and his colleagues published mainly twin studies of personality, epilepsy, schizophrenia, and neurosis. In 1970, he received an award from The Japan Society of Human

Genetics titled, 'Twin Studies and Human Behavioral Genetics'. After 1979, he and his colleagues published 23 papers related to multiple birth rates, infant mortality of multiples, birthweights and birth defects of multiple births in Japan. These papers were widely read and highly regarded by other twin researchers worldwide. He published many papers written in Japanese, and edited several books on medical genetics, human genetics and other topics, also in Japanese. He retired in 1980, and became an emeritus professor. After his retirement, he assumed the role of Director of the Institute for Developmental Research in Aichi Prefectural Colony, between the years of 1981 and 1984. He was also a Member of the Science Council between 1985 and 1991.

His status in the international community of twin researchers was supported by his election to Vice-President of The International Society of Twin Studies (ISTS) for the 1981–1983 term, and he also served as President between 1990 and 1992. In 1992, he organized the 7th International Congress on Twin Studies in Tokyo, Japan. He served as a member of the editorial board for *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae* between 1979 and 1998.

His strong leadership abilities were recognized by his election as the President of The Japan Society of Human Genetics between 1977 and 1987 and of The Japan Society for Twin Studies between 1987 and 1992. In the latter Society, he last attended the annual meeting of this organization when it was held in Tokyo until 2007. His remarks, made as a respected elder statesman of the Japanese medical community, offered profitable suggestions for stimulating the members of the society, thus providing them with valuable treasures, as he had actively promoted and raised the level of twin research in Japan since 1960.

Professor Inouye's hobbies included skiing, playing golf, gardening, drinking wine & sake, listening to classical music, and art appreciation. I met him last June at his house after the 13th ICTS in Seoul. In his garden, beautiful English irises were in bloom, giving pleasure to the gardener and to the guest. At that time he was quite healthy and continued to talk about twin studies.

We will miss him and his wisdom greatly as we would a flower that wilted in full bloom.

His references related to twin studies are as follows:

## References

- |  |  |
|--|--|
| Inouye, E. (1957). Frequency of multiple birth in three cities of Japan. <i>American Journal of Human Genetics</i> , 9, 317–320. | index cases with chronic epilepsy and their co-twins. <i>Journal of Nervous and Mental Disease</i> , 130, 401–416. |
| Inouye, E. (1960). Observations on forty twin  | Inouye, E. (1964). Genetic basis of human  |

- behavior. *Folia Psychiatrica et Neurologica Japonica*, *18*, 183–192.
- Inouye, E. (1965). Similar and dissimilar manifestations of obsessive-compulsive neuroses in monozygotic twins. *American Journal of Psychiatry*, *121*, 1171–1175.
- Inouye, E., Kamide, H., Ihda, S., Izawa, S., & Takuma, T. (1966). Effect of bovine brain hydrate on mentally retarded children: A multidisciplinary clinical experiment using co-twin control. *Progress in Brain Research*, *21*, 1–39.
- Inouye, E. (1970). Twin studies and human behavioral genetics. *Japanese Journal of Human Genetics*, *15*, 1–25.
- Inouye, E. (1972). Monozygotic twins with schizophrenia reared apart in infancy. *Japanese Journal of Human Genetics*, *16*, 182–190.
- Ikeda, K., Asaka, A., Inouye, E., Kaihara, H., & Kinoshita, K. (1973). Monozygotic twins concordant for Prader-Willi syndrome. *Japanese Journal of Human Genetics*, *18*, 220–225.
- Inouye, E. (1973). Some considerations in the methodology of human behavior genetics. *Social Biology*, *20*, 241–245.
- Inouye, E. (1977). Use of twin registers in the study of human diseases. In Japan Medical Research Foundation (Ed.), *Gene-environment interaction in common diseases* (pp. 221–222). Baltimore, MD: University Park Press.
- Imaizumi, Y., & Inouye, E. (1979). Analysis of multiple birth rates in Japan. I. Secular trend, maternal age effect, and geographical variation in twinning rates. *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae*, *28*, 107–124.
- Imaizumi, Y., Asaka, A., & Inouye, E. (1979). Analysis of multiple birth rates in Japan. II. Secular trend and effect of birth order, maternal age, and gestational age in still-birth rate of twins. *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae*, *29*, 223–231.
- Asaka, A., Imaizumi, Y., & Inouye, E. (1980). Analysis of multiple births in Japan. I. Weight at birth among 12,392 pairs of twins. *Japanese Journal of Human Genetics*, *25*, 65–71.
- Asaka, A., Imaizumi, Y., & Inouye, E. (1980). Analysis of multiple birth in Japan. II. Weight at birth of triplets and quadruplets. *Japanese Journal of Human Genetics*, *25*, 207–211.
- Asaka, A., Imaizumi, Y., & Inouye, E. (1980). Analysis of multiple births in Japan. III. Analysis of factors affecting birth Weight of twins and triplets. *Japanese Journal of Human Genetics*, *25*, 213–218.
- Asaka, A., Imaizumi, Y., & Inouye, E. (1980). Analysis of multiple births in Japan. IV. Body weight of 4,317 twin pairs at one year of age. *Japanese Journal of Human Genetics*, *25*, 309–317.
- Imaizumi, Y., & Inouye, E. (1980). Analysis of multiple birth rates in Japan. III. Secular trend, maternal age effect and geographical variation in triplet rates. *Japanese Journal of Human Genetics*, *25*, 73–81.
- Imaizumi, Y., & Inouye, E. (1980). Analysis of multiple birth rates in Japan. IV. Secular trend, maternal age and gestational age in stillbirth rates of triplets. *Japanese Journal of Human Genetics*, *25*, 219–227.
- Imaizumi, Y., & Inouye, E. (1980). Analysis of multiple birth rates in Japan. V. Seasonal and social class variations in twin births. *Japanese Journal of Human Genetics*, *25*, 299–307.
- Park, K. S., Inouye, E., & Asaka, A. (1980). Plasma and urine uric acid levels: Heritability estimates and correlation with IQ. *Japanese Journal of Human Genetics*, *25*, 193–202.
- Imaizumi, Y., Inouye, E., & Asaka, A. (1981). Mortality rate of Japanese twins: Infant deaths of twins after birth to one year of age. *Social Biology*, *28*, 176–186.
- Asaka, A., Imaizumi, Y., & Inouye, E. (1981). Analysis of multiple births in Japan. V. Effects of gestational age, maternal age and other factors on growth rate of weight in twins. *Japanese Journal of Human Genetics*, *26*, 83–90.
- Imaizumi, Y., Inouye, E., & Asaka, A. (1981). Mortality rate of Japanese twins and triplets. II. Socioeconomic factors influencing infant deaths of twins after birth to one year of age. *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae*, *30*, 275–280.
- Imaizumi, Y., Inouye, E., & Asaka, A. (1981). Mortality rate of Japanese twins and triplets. III. Infant deaths of triplets after birth to one year of age. *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae*, *30*, 281–284.
- Inouye, E., & Imaizumi, Y. (1981). Analysis of twinning rates in Japan. In L. Gedda et al., (Eds.), *Twin research Vol. 3: Twin biology and multiple pregnancy* (pp. 21–33). New York: Alan R. Liss.
- Asaka, A., Imaizumi, Y., & Inouye, E. (1982). Analysis of multiple births in Japan. VI. Effects of gestational age and maternal age on growth rate of weight in triplets. *Japanese Journal of Human Genetics*, *27*, 23–26.
- Imaizumi, Y., & Inouye, E. (1982). Analysis of multiple birth rates in Japan. VI. Quadruplets: Birth and stillbirth rates. *Japanese Journal of Human Genetics*, *27*,

- 227-234.  
 Imaizumi, Y., Asaka, A., & Inouye, E. (1982). Analysis of multiple birth rates in Japan. VII. Rates of spontaneous and induced terminations of pregnancy in twins. *Japanese Journal of Human Genetics*, 27, 235-242.
- Okajima, M., Iwayanagi, C., & Inouye, E. (1982). Absence of palmar digital triradius d in Japanese twins and their families. *Japanese Journal of Human Genetics*, 27, 27-34.
- Imaizumi, Y. & Inouye, E. (1984). Multiple birth rates in Japan: Further analysis. *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae*, 33, 107-114.
- Inouye, E., Park, K. S., & Asaka, A. (1984). Blood uric acid level and IQ: A study in twin families. *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae*, 33, 237-242.
- Imaizumi, Y., Asaka, A., & Inouye, E. (1990). Fetal deaths with birth defects among Japanese multiples, 1974. *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae*, 39, 345-350.
- Inouye, E. (1992). Twins and genetic studies of man. *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae*, 41, 91-96.

(*Twin Research and Human Genetics*, Volume 14, Number 1, pp.109-110, February 2011

より転載)

## 井上英二先生を偲んで

大木 秀一 (石川県立看護大学)

井上英二先生とは、昨年の数え 90 歳のお祝いの会でお目にかかったのが最後となってしまいました。その時の矍鑠としたお姿を思い出すと、ご高齢のこととはいえ、突然の訃報に驚いております。

先生にまつわる個人的な思い出を書きとめたいと思います。先生と初めてお会いしたのは、今から 20 年以上も前、私がまだ大学院生で駆け出しの双生児研究者だった頃です。世代的には、私は、井上先生の弟子（言わずもがな、浅香昭雄先生ですが）の弟子にあたります。初めてお会いした時から、その存在感は強く、大学教授が次第に大衆化していく中で、先生は最後まで学者らしい研究者であり、私の中ではいつまでも威厳のある存在でした。

学会などでお言葉を頂く機会には恵まれました。こと研究に関しては、お幾つになられても妥協がなかったと感じています。そのため、うっかりした感想や曖昧な内容を発言することはできませんでした。また、私は井上先生がご執筆した双生児研究法の文献を、誰よりも熱心に読んだ一人ではないかと思います。学生時代より何度も読み返しておりました。古典的な遺伝率の推定法に、Holzinger の式（1929 年）と呼ばれる有名な式があるのですが、ご著書の中で、国内で定着している計算式が、実は原典とは異なることをご指摘なさっていたことが印象的です。

1989 年にローマで国際双生児研究会議が開催されました。次回大会が井上先生を大会長として、東京で開催されることが決定しており、先生がバンケットの席でご挨拶した光景は今でも鮮明に思い出されます。

今でも、東大精神衛生学教室の双生児資料室には井上先生の調査や論文別刷りを始めとする貴重な資料があまた保管されているのですが、講座の主が変わるごとにその資料の貴重さを説明し、散逸・廃棄されることがないようにお願いするために足を運びました。東大附属での双生児卵性診断特別検査も、人類遺伝学の進歩により、井上先生がなさっていた頃に比べれば、非常に簡素なもの

に変わってきました。やはり時代の流れを感じざるを得ません。しかし、その間に双生児研究には果たしてどれだけの進歩があったのでしょうか。確かに、統計的な解析手法やレジストリーの拡大などの大幅な進歩はありましたが、人間の本質に迫るエポックメイキングな発見は未だなされていないように思います。

ご葬儀の場で、先生のご命日が、奥様がお亡くなりになられてから丁度 20 年目の同じ日だとお聞きしました。当時大学院生としてお通夜のお手伝いに伺ったのですが、あれから 20 年もの歳月が経っていました。私なりに細々と双生児研究を続けてきましたが、この間に残した仕事の微々たることを振り返るとき、忸怩たる思いは禁じ得ません。しかし、双生児研究者の端くれとして、これからも精進し続けなければと、気持ちを新たにしているところです。日本の双生児研究の歴史を築いた一つの時代の終わりを告げたのかもしれない。

心よりご冥福をお祈りいたします。

## 井上英二先生を偲んで

岡崎 祐士（東京都立松沢病院）

何年前であったか記憶が定かではありませんが、大学の他の先輩のお別れ会で井上先生の姿をお見かけしました。いつものようにピシッと決まった服装と真直ぐな姿勢で振舞っておられました。私の中では、その時のご様子から今回のご訃報につながっていますので、井上先生は最後まで、その格好いいイメージのままです。

井上先生には、母校の精神医学教室に入って 3 年目の頃、分野を極められた先輩にまとまったお話をしていただく機会をもった時が初めてでした。先生は双生児研究について、10 回にも亘ってレクチャーしていただきました。私が連絡係りであったのですが、当時は気が利かず、貴重な講義の記録を残したり、出版したりということも思いつかず、ただ皆真剣に聴講しただけでした。先生は、講義用のメモを準備するなど、随分と力を注いでお話し頂きました。10 回の講義は消化しきれませんでした。双生児法の魅力や重要性については、しっかり記憶に残りました。浅香先生とその後、研究等をご一緒することになったのも、この時からであったと思います。

井上先生の講義を受けた年か翌年、初めて頂いた科学研究費は双生児法を用いたものでした。統合失調症の成因と病態の研究方法について考えると、一卵性双生児不一致法が最も洗練された方法であるという考えにいたり、1987 年に赴任した長崎で統合失調症双生児の発見を始めました。その過程で双生児研究学会に参加し、再び井上英二先生にお会いすることになりました。私どもの双生児対象は、当時まだ発症危険年齢域を通過していませんでしたので、暫定値でしたが、井上先生の報告よりは一卵性双生児の一致率が低い値でした。井上先生は発端者法の一致率はあまりお好きではなかったという印象を受けました。理論的な理解は私には分かりませんが、一番大事なことは組法であれ、発端者法であれ、発見率が高いことが重要であるとお考えになっていたのではないかと思います。私どもの標本が、長崎県における推定統合失調症双生児数の 44% 以上を発見していることに関心を示していただき、評価していただきました。今や標本の大部分が発病年齢域を超えましたので、再調査して、井上先生の統合失調症双生児診断一致率に継ぐ日本からの診断一致率の報

告をしたいと思っています。井上先生が収集され、種々の評価をされた統合失調症一卵性、二卵性双生児標本は、この分野の宝だと思います。井上先生からある日、そのサマリーシートのコピーを頂きました。もちろん個人は同定できないようになっています。この中に含まれた貴重な情報は、今後生かしていきたいと思っています。

井上先生が、双生児研究をなぜ選ばれ、愛されたかはお聞きしたことはありませんが、きっと先生の思考法とライフスタイルに合っていたからでしょう。双生児法とともに、井上英二先生のお名前はいつまでも記憶されるに違いありません。ご冥福をお祈りする次第です。

## 井上英二先生の思い出

### 岡嶋 道夫（東京医科歯科大学名誉教授）

井上英二先生のご経歴やご業績はすでに多数発表されているので、ここでは井上先生と私との関係について簡単に触れてみたいと思います。先生とのお付き合いは東京大学附属で双生児の研究が始まったときですから随分長い年月にわたります。私は研究班の一員として双生児の皮膚紋理を定年になるまで採取しました。そして40歳になるころまで、その資料を用いた研究を続け、新しい知見を多数発表することができました。しかし、私の双生児を用いた研究はそのころに終わりました。その理由はふとしたことからラットに皮膚紋理のあることを発見し、研究はもっぱらその方面に向かって進んだからでした。面白いことにラットの近交系を調べたところ、系統特有の紋理が現れていることを知りました。近交系というのは兄妹交配を何代にも渡って続けて作った系統で、その間に系統内のゲノムは全個体同一になってしまい、一卵性双生児と同じ状態になったものです。そこでそれについて定年まで研究を続けました。丁度私が定年になったころでした。ある学会からの帰りに東海道新幹線のなかで井上先生と一卵性双生児と近交系について議論を始めました。先生とは両者のゲノムの構造について考え方に微妙な違いがあったからでした。座席には今泉先生、浅香先生も同席であったような気がします。かなり活発な議論でしたので一寸驚かれていたご様子でした。今思い出すと井上先生との楽しい活発な討議の一コマでした。

私はいつも井上先輩に導かれて仕事をしてきました。先生の後任として、日本人類遺伝学会雑誌の編集委員長を仰せつかり、雑誌の英文化に向けての編集を始めましたが、井上先生を手本にしてみました。その後も人類遺伝学会、双生児研究学会などで、井上先生と一緒に仕事ができることを嬉しく思っています。私も今不治の病を患っており、長い入院の後3日前に自宅に戻り、この原稿をようやく書いたところです。

(2011年4月18日)

## 井上先生の偉大さを偲んで

加藤 則子（国立保健医療科学院地域保健システム研究分野）

井上英二先生のご逝去に当たり、心よりお悼み申し上げます。

井上先生に初めてお教を賜ったのは、学部学生のころでした。あまり熱心とは言えない医学生のおたくしにとって、「人類遺伝学」は他の科目同様大変難解でした。学期末の試験問題は「生後〇か月の乳児がフェニルケトン尿症と診断された。あなたは担当医師として、両親にどのような対応を取るか」というものでした。当時の診断技術や医療技術での議論だったので、要求されていた回答内容はもちろん現代のそれとは異なっていたと思いますが、正確な知識と実践的なコンピテンシーの両方が要求された包括的な問題に四苦八苦したものでした。卒後小児科に進み、臨床現場でそれに似た状況には幾度となく臨んだので、あのときちんと学んでおけばよかったと思うと同時に、井上先生の医学教育の視点の的確さにつくづく感心申し上げたのであります。

その後研究職につき、いろいろな研究テーマに取り組んでいくうちに、縁あって日本双生児学会で学ばせていただくようになりました。そこで触れた内容は、遺伝学、法医学、精神医学、生理学、疫学などの、しかも学際的な領域を含む高度なものでびっくりするとともに、創始者が井上先生であることを伺い、なるほどこの格調の高さは井上先生のお志の高さによるものに違いないと強く思いました。

年月がたち、ある日慶応義塾大学の安藤寿康先生と双子プロジェクトのことでお教を請いに井上先生のご自宅にお邪魔しました。実際のお歳とは思えない矍鑠としたお姿に驚くとともに、投げかけられた質問に対し十分すぎるうん蓄を傾けつつ簡潔にお答えになる妙味を、ただ啞然として拝聴していました。一学問領域を築きあげた大家というのは、こういう感じでいらっしゃるのだと、その場にいられたことの喜びをかみしめていました。

このような、学会員の精神的支柱の根幹的存在であられる井上先生が旅立たれたことは残念でなりません。謹んでご冥福をお祈りいたします。

## 井上先生の思い出

黒木 良和（川崎医療福祉大学）

先生の訃報に接したのは出張から帰った日の夜であった。すでに全ての葬儀が終わった後で、最後のお別れもできなかつたことに申し訳ない気持ちで一杯であった。先生のごことは人類遺伝学会の重鎮として存じ上げてはいたが、近くで先生に接する機会ができたのは、学会の庶務幹事を仰せつかってからである。何時もスマートでそつのない先生であったが、庶務幹事の仕事を通して先生のお人柄に感銘を受けることが多かった。その頃の思い出のいくつかを紹介することにしたい。庶務幹事を受けた1979年当時の人類遺伝学会は未だ基礎医学中心の学会であった。欧米では臨床遺伝専門医制度が始まり、遺伝学の臨床応用が現実のものとなっていた。遺伝医療の発展を模索していた同士数名で臨床遺伝認定医制度の計画を始めたが、当時の理事会では遺伝学研究の妨げになりかねな



私はその後大学院に進学しましたが、実は卒業論文も修士論文も、またその後の多少のものについても井上先生はご一読下さり、あたたかい感想を送って下さいました。修士論文では「力作」とのお言葉も頂戴し、お心ある励ましに本当に嬉しく思いました。

なかなか順風満帆にいかない私の人生の折々に、井上先生からのあたたかいホカホカの《お言葉力》がありました。“焦らず時の経つに委せていると「自然」に眼前が開けて来ることが・・・”“無理をしないで下さい、いづれ花が咲くでしょう”・・・この度、いただいたお葉書を読み返しながら、改めて井上先生の《あたたかいホカホカ》がどれほどのものであったのか、しみじみと感じ入っている次第です。

井上先生、本当に本当に、有り難うございました。心より感謝申し上げます。

## 井上英二先生を偲んで

### 杉浦 祐子（ツインズマザーズクラブ）

昨年の井上先生のお通夜に先生とお別れをしてきました。厳しい中にも人間味あふれた先生のあれこれが、思い出されました。

先生に初めてお目にかかったのは、東京で国際双生児学会が開催された時でした。双生児研究のことなどさっぱりわからない当時、ツインマザーズクラブもいづらかのお手伝いをさせていただいたのです。井上先生は、大会長で、きびきびと動かれているご様子を遠くで拝見していました。その後、日本双生児研究学会の折に、先生を昼食の場所に何度かご案内させて頂いたこともありました。私たち、ふたごの母親には、いつもやさしくお声をかけて下さいました。

ツインマザーズクラブには、たくさんお心をかけていただいていたと思います。2006年に会が保健文化賞をいただいた時には、学会のニューズレターに「心から敬意と祝福の言葉を贈りたい」と書いていただいています。双生児研究には、ふたご自身と母親、家族の協力が必要とされていたからこそです。

18年くらい前から東京大学教育学部中等教育学校の研究室にお手伝いに行っているのですが、2004年に附属にきていただき、附属における初期双生児研究の歴史ということで、お話いただきました。（ニューズレター第45号）

卵性診断が現在のようにできない時代、井上先生お一人が、40以上もの項目を検査されたこと、その後の双生児研究のことなど伺いました。今でも当時のさわると破けてしまいそうな記録が、研究室にはあります。その当時80を超えていらっしゃる先生のお話は、きちんと用意され、何十年も前の研究に誇りをもたれ、これからの附属の双生児研究に期待されていたものでした。帰り、門までお送りしたのですが、ご自分で運転されてお帰りになりました。「足が少し悪いので、車が楽なのよ。」とやさしく手をふられていかれました。お話の内容の記録を一字一句見てなおして下さっていました。

2009年5月天羽幸子先生の発案で、井上先生の90歳をお祝いする会が、ありました。その席でも、あいかわらず、矍鑠とされ、ダンディな先生は、昔お目にかかった頃とお変わりなく、又吉先生の持ってきてくださったバースデーケーキの灯りを嬉しそうにけされていました。先生は、GODIVAのチョコレートが、特に好きということで、お渡ししたら「これ、大好きよ！」と笑みを浮かべ

られていたのが、最後にお会いした時になってしまいました。先生は、その時に先生のもとで研究されていた先生方が、今もお元気で研究されているのをご覧になって、ただの老人ではいけませんね、と言われた後、「自分で責任をもって、最後まで自分がしたいことをする」と厳しい声で話され、長いこと研究を続けられた先生の信念がうかがわれました。

人生に必要なことを先生の生き方、お話の中から教えていただけて気がします。ありがとうございました。

## 50年あまり前の双生児研究合宿

### 詫摩 武俊（名誉会員）

井上英二先生とお話しできるようになったのは高木正孝さん（1913-1962）を通してであった。高木さんは東大文学部哲学科卒業後、1938年（昭和13年）からベルリン大学の Kurt Gottschaldt 教授のもとに留学された。高木さんはドイツの社会によく適応し多くの友人、知人を得た。ベルリンにソ連軍が侵攻する直前スイスに脱出し、昭和23年頃帰国した。そのあと高木さんは東大医学部附属脳研究施設で井上英二先生と双生児研究を企画されていた。脳研から双生児研究に関心を持つ若い人を差し向けて欲しいという要請が文学部心理学研究室にあって、私が志願して井上英二、高木正孝両先生の指導を受けることになった。わたしには大きな出会いであった。

井上先生を中心とする双生児合宿は昭和20年代後半に沼津、山中湖、野尻湖などの大学の施設を利用して行われた。機関は5~6泊、十数名の一卵性及び二卵性の双生児が参加した。すべて中学生で男女同数だった。

野尻湖の寮まではその当時上野から7~8時間かかった。研究班のメンバーは事前に何度も会合を重ね、主として観察対象とする双生児を決めた。車内の行動、会話、移動、倦怠感、双生児相互間の会話、他の仲間との行動などをそれとなく観察した。寮に到着してからは毎日、寝起きの良さ・悪さ、食事をする速さ、箸の持ち方、仲間に対する積極性、親和性、その人に固有のテンポ、英語や数学の補習時間の態度や姿勢が崩れていく変化が背後にいる研究者によって観察された。さらに蚊帳の中で寝ている姿も見た。楽にしているときの手の位置、足の位置、上向きか、横を見ているかなど、寝ている姿がよく似ていることに印象づけられた。

試肝会も計画した。夕食後、湖畔に星座の観察に行った。研究グループは少しずつ去って、かねてよく打ち合わせていた通りものかげに隠れて待っている。中学生諸君は湖水にまつわるコワイ話をたっぷり聞かされた。「これから一人ずつ寮に帰りなさい」といわれる。

そして2分間隔で約200メートルの砂の登り道を帰るようにといわれた。対偶者が一緒にならないよう予め決めた順で2分おきに出発するようにした。

研究グループはボート小屋や大きな樹の下にかくれて、経過する人を驚かす。若い女性の研究者が顔におしろいを濃く塗って口紅を耳のそばまでひき長い髪をたらして「コンバンワ」と声をかける。これに対する反応は対偶者間でよく似ていた。悲鳴をあげる者、砂をかけて攻撃する者、まったく無関心に通り過ぎようとする者など、状況に対する反応の差は大きく、あとでその双生児の日常生活と対照して考えると首肯できる点が多かった。

合宿中にはこんなこともあった。夜、やや大型のボートに男子2組、4人の中学生を載せて漕ぎ

始めた。4～5分後に霧がかかって寮の灯も見えなくなった。まわりは数メートルしか見えない。しまったと思った。しかし私が不安がるといけないと考えてオールをボートの中に入れ、やがて霧ははれるし、この湖から滝になって落ちることはないからみんなで歌を歌おうといった。やがて霧ははれて我々は無事に寮に帰った。双生児のA兄弟は霧で視界が失われても平気で歌い、おしゃべりをしていた。B兄弟はかぼそい声で大丈夫ですか、大丈夫ですかと聞いて2人が抱き合っていた。状況の認知の仕方、感受性の程度に著しい対照差があることを私は体験した。

ここに述べたことは50年あまり前、井上英二先生の構想に基づいてなされた研究である。着想の緻密さ、見事なリーダーシップには今も私は深く敬服している。心身とも疲れた合宿であったが井上先生から得た研究の着眼点、実行力は大きく、この頃から人格の層理論(Schichtentheorie)に私は傾斜していくことになった。山中湖、野尻湖の双生児合宿から学んだことは大きかった。井上英二先生に心から御禮を申し上げる。(2010年11月17日)

## 井上英二先生の思い出

### 竹下 達也 (和歌山県立医科大学医学部公衆衛生学教室)

私は、昭和55年医学部医学科卒業で、井上先生には昭和53年の1月から2月にかけて人類遺伝学の講義を受講した教え子の一人です。私は学生時代からとくに社会医学に関心を持っていた人間ですが、当時研究が大きく発展しつつあった遺伝子およびその本体であるDNAに関する講義には大変興味を持っていました。とはいえ、受験科目に生物を選択していませんでしたので基礎的知識が極めて不十分なままで受講していたことを覚えています。井上先生のご講義は、お声もすばらしいお声なのですが、ご説明も大変わかりやすくて心地よくお聞きしたものです。実は当時の講義ノートは今も大事に保存していますが、私にしては珍しくしっかりと丁寧にメモがとられていますので本当に理解しやすい名講義だったのだと思います。

その後私は昭和56年から山梨医科大学において、日暮眞先生および浅香昭雄先生に師事いたしまして染色体の実験的研究や双生児研究の解析を手ほどきしていただきました。その後アルコール感受性を規定する遺伝子型と生活環境要因との遺伝子-環境相互作用を主なテーマとして今日まで歩んで参りました。井上先生は私が人類遺伝学と出会う機会を与えてくださり、また人類遺伝学の魅力を伝えてくださった最初の恩師であり、本当に感謝いたしております。天国でゆっくりお過ごしになり、日本の人類遺伝学の発展していく様をお見守りください。



## 井上英二先生の思い出

徳永 勝士（東京大学大学院医学系研究科人類遺伝学分野）

初めて井上先生のお話を聞きしたのは、当時東京大学理学部生物学科人類学教室の学生だった私が、東京大学医学部の人類遺伝学の講義を聴講させていただいた時です。井上先生ご自身が主に双生児研究について講義して下さい、加えて何人かの先生が招かれてそれぞれの専門分野について講義して下さいました。井上先生はまさにダンディーなカッコいい大先生で、私は先生の講義によって人類遺伝学における双生児研究の重要性を理解しました。

大学院で所属した尾本恵市先生の研究室が東大教育学部附属中等教育学校の双生児卵性検査をお手伝いしていた関係で、井上研究室にいらした朴京淑先生（韓国誠信女子大・教授）が検体を届けて下さったことも覚えています。朴先生とは後年、補体系タンパクの遺伝的多型について多くの共同研究をさせていただきました。

その頃も毎年人類遺伝学会で井上先生をお見かけしておりましたが、私のような若造が直接お話しする機会もなかったと思います。ただ、井上先生や荻田先生が主催された「遺伝学セミナー」に参加して、大野乾先生をはじめ素晴らしい先生方のご講演を聴き、また同世代の多くの知人を得ることができたことは、その後の私のとても大きな財産となりました。

東京大学医学部は長年にわたって人類遺伝学講座の設置を文部省に要求し続けていましたが、1992年、大学院に国際保健学専攻の設置が認められた際に新設講座のひとつとして人類遺伝学が設置されたと伺っています。私は縁あってその2代目の教授を拝命いたしました。これに伴い、教育学部附属中等教育学校の双生児卵性検査の責任者も務めております。その後は人類遺伝学会などでお目にかかる度に、折角できた人類遺伝学教室をしっかり守り発展させるよう励ましていただきました。私もいつまでも矍鑠とした井上先生に感銘を受けておりました。井上先生はじめ大先達のご期待に応えられているかどうかわかりませんが、今後も精一杯教室員とともに頑張ることをお誓いいたします。

最後に、私が編集長を務める Journal of Human Genetics に、浅香昭雄先生の原稿をいただいて井上英二先生の obituary を掲載させていただくことを報告いたします。

井上英二先生、安らかにお眠り下さい。

## 井上英二先生の御逝去を悼む

早川 和生（大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンター長・  
日本双生児研究学会会長）

日本双生児研究学会の創設者として長年にわたり我が国の双生児研究の進展をリードし続け国際的にも多大な学術的貢献をされた井上英二先生が御逝去されたことは後に残された我々日本双生児

研究学会員にとって誠に痛恨の極みとなり、大きな心の支柱を失ったようです。以前、井上英二先生を大会長として東京で開催された国際学会 **International Congress on Twin Studies** において私も企画委員会メンバーとして参画して以来、長年、常に温かい指導とアドバイスをいただいていた井上英二先生の急逝は私のみならず数多くの学会員の夢想だにできなかった悲しみとなってしまいました。生前、井上英二先生に大阪大学のツインリサーチセンター設置について報告をさせていただいた時にもお返事をいただき「ふたご研究もようやくここまで来たのかと感慨深いものがあります。貴計画が順調に発展することを祈念しています」と自筆で書いて研究発展を精神的に後押ししていただき非常に心強くした記憶が再びよみがえって深い感謝の念を覚えずにはいられません。また以前、日本双生児研究学会学術集会で私が高齢ツインの研究発表をした時にも発表内容に関連した文献資料が東京大学で井上先生が教授を務められた研究室に保存されているので参考にするようにアドバイスいただき、その後に東大に行って資料を見せていただき非常に役立ったこともありました。

井上英二先生の御遺徳と比類ない幾多の学術的な御功績は今後も末永く双生児研究に携わる多数の研究者の胸の中に生き、長く称えられるものと確信しています。ここに謹んで哀悼の意を表し、喪心よりご冥福をお祈り申し上げます。

## 井上英二先生を想う

日暮 眞（東京大学名誉教授）

井上英二先生との出会いは今から40年以上前になるが、個人的に親しくお付き合いをいただくようになったのは昭和47年秋以降であった。当時カナダ留学から帰り、しばらく籍を置いていた杏林大学小児科より東大母子保健学教室に戻った私に、ある日、同じ東大医学部3号館に居られた井上英二先生から呼び出しがかかった。用件は「人類遺伝学講義の一部分担と人類遺伝学会庶務幹事を担当せよ」との二件であった。私としては上司である母子保健学講座の平山宗宏教授の了承を得なければ受けられない旨返事したが、幸か不幸か、平山教授の反対も無いまま両件ともお引き受けすることとなってしまった。日本人類遺伝学会会長であられた井上英二先生は学会長としての通常業務は勿論のこと、現文科省の科研費をも担当されていた為にその部分の会計処理と庶務業務とも負う羽目になった。しかし、井上先生は学術面での業績も然ることながら、事務処理面での御指示も的確であった。私にとって本来の上司であった平山先生が主任研究者であった現厚生労働省の厚生科学研究の会計担当も併せて負っていたため、当時の私は医師・研究者・教官というよりは事務官の如き日々であった。そのような労苦の中から、井上先生から文部省科研報告の処理技法を、平山先生から厚生省研究報告の処理技法を学習させていただいたと感謝している。というのは、これらの学習成果が後年山梨医科大学（現山梨大学医学部）などで独立する時に生きてきたのである。

人類遺伝学の中で専門分野は異なり、双生児研究に関しては余り学習しなかったけれども、広い意味での「研究」への姿勢はしっかりと教えていただいたつもりである。但し、井上先生の真骨頂スマートさはとても学びきれていなかったが…。

## 「ふたごから学ぶこと」

福島 昌子(東京大学教育学部附属中等教育学校)

東京大学教育学部附属中等教育学校（以下、東大附属）は、昭和 22 年に双生児の調査・研究をすることを条件の一つとして文科省から東京大学の附属となることを認められました。創立以来、総勢 904 組の双生児を入学させ、さまざまな実践や調査、ケーススタディなどを通して双生児研究をすすめてきました。その中でも双生児法による研究活動は、双生児を通して「遺伝と環境」のかかわりについて、一般教育により広く役立てようという創設時からの考え方に基づいて行われています（これらの研究成果は『東大附属論集』の各号、『双生児』（日本放送出版協会 1978）、『ビバ! ツインズ』（東京書籍 1995）に収録されています）。東大附属は、双生児を多く入学させている世界でも珍しい唯一の学校といわれ、現在でも双生児研究委員会という部署が存在しており、教育学、心理学、医学、発育・発達学などの専門分野の発展に大いに寄与してきたといえます。そのような学校を創るのにかかわられた一人に当時の東京大学の脳研究所に所属されていた井上英二先生がいらっしゃいます。その井上先生が残された功績は本校論集を始め、保管されている研究論文などのいたるところに見られ、今でもなお私たちに教えてくれることが多々あります。しかしながら、私の中では、特に面識があるというわけではなく、伝説的に語り継がれてきた名誉ある先生のお一人として記憶の中で存在しているだけのため、ここでは井上先生との思い出を語るということではなく、先生が残された東大附属双生児の歴史の一端を担っている一人の教員として、双生児の子どもたちから教育現場で学んだことを述べさせていただきたいと思います。

東大附属では、一学年 120 名（男女各 60 名）中、40 人までの「双生児枠」を設け、毎年相当数の双生児を入学させてきました。入学すると双生児たちは別々のクラスに分けられるのですが、休み時間や総合学習、部活動などでは一緒にいることが多く、見分けがつかなくなることがよくあります。そのようなとき初めのうちは私たち教師は、二人をホクロの位置や持ち物等の外見上の違いによって判断をしたりしていました。ところが不思議なことに、クラスメイトたちは決して二人を取り間違えたりすることはありません。生徒たちに「どうして間違えないのか」と質問すると、「全然、違うじゃない。どうしてわからないの？」と逆に聞き返されてしまうことがしばしば。不思議に思いながらも二人のうち的一方と話していたあるとき、二人が全く別の人物に見え、生徒たちがふたごを間違えない理由がわかったような気がしたときがありました。今思うと、それが私の中でその子自身の中に「個」を見出だした瞬間だったのだと思います。わたしたちは個々の生徒を、実はこれまで顔の特徴の違いや成績の良し悪しといった、目立つ指標によって区別しているだけに過ぎなかったのだと思います。しかし、生徒たちは外見的な類似を越えて、他の誰でもないユニークな個人を双子のそれぞれを認知し見分けていたのです。このことを私自身の中で認識したとき、教師として、これまで私は一人一人の生徒の真のユニークな個を見てきていたのだろうか、我に振り返えさせられました。このような外見的な特徴の違いがゼロに近い双生児にかかわるからこそ、生徒を一人の個人として認知するという意味を逆に教わることができたのだと思います。教育の世界では「生徒の個性を伸ばす」「生徒の個に応じた…」ということばがよく使われます。しかし、はたして真のユニークな生徒の個を教師である私たちが本当の意味で認知し教育に携わってきたのだろうか。私にとって当たり前と思っていたことが、実は当たり前ではなかったということに気づかせてくれたのが双子の子どもたちだったのです。まさに双子の子から教わる「教育の知」そのものであり、人を理解するということの最も基本的な原点であったのだと思います。

このように多岐にわたる専門領域での資源を、世界的遺産を、残してくださった井上英二先生の偉大さを65年経った現在、なお深く改めて敬服するばかりです。また人間を多面的にとらえ、人間そのものを知るために、双生児研究を残してくださったのだと、心から感謝いたしております。井上英二先生の意思をこれからも東大附属の教員の一人として誇りに思い、引き継いでいかなければならないと改めて思っております。ここにその感謝の意を表し、お礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

## 車中歓談 — 思い出することなど —

又吉 國男（所沢第一病院健診センター長）

井上英二先生の訃報に接したのは、出勤途中の今泉先生からの連絡でした。その5ヶ月程前にお会いしたばかりでしたので、俄に信じ難く一瞬呆然としたのを思い出します。とりあえず令嬢桃子様に弔電を打たせて頂きましたが、お会いした折りのお見送り、品のいい白い鬚の紅顔 一本当に若々しい— に笑みをたたえ乍らタクシーに乗られたご様子を拝見したのが最後となってしまいました。成程、一途に情熱をもって生活されていると歳を感じさせないものだ、とさえ思ったものです。それだけに本当に残念でなりません。

井上先生に初めてお会いしたのは 一夙に著書などでお名前は存じ上げていたのですが— 東大山上会館で開かれた第2回の双生児研究学会に、吉田啓治先生と御一緒した折りでした。ダンディでエネルギッシュな先生だというのが第一印象です。

その後、同学会で“性の異なる一卵性双胎”を発表させて頂いた時には、いくつかの資料を送って下さったり、先生が会長を務められた東京での“国際双生児研究会議”では、私も委員の末席に加えさせて頂きましたが、その時も会議の度に貴重なアドバイスを頂き、無事小生の分担を果たすことが出来ました。今更乍ら厚く御礼を申し上げる他有りません。

しかし、先生との思い出で最も印象に残っているのは、三重での学会 一第14回— の帰り、車中ご一緒させて頂いたことでしょうか。今となってはどういう経緯で向かい合って話をするようになったのかも記憶に無いのですが、話の内容は妙に鮮明に憶えています。

勿論ふたごの話ですが、概ね雑談で、シェークスピアの“十二夜”のこととか、ヒトラー傘下のメンゲレのことなども話題にされ、先生の該博な知識に驚かされました。たまたま偶然当時世間を騒がせていたエイズ訴訟に話が及び、“阿部英君は同期だったんですよ。どうしてあんなっちゃうんだろう”と、瞬間空を凝視されたのも、未だ眼裏に甦ります。

しかしその時先生が最も熱く話されたのは、その頃、各地で結成されていた“ふたごの親の会”の資料、会報やパンフレット類の収集と、その散逸を防ぐことでした。勿論私がいくつかの会の顧問をしているということも御承知で、“貴重な資料ですから大切にしていって下さいよ”と念を押され、どこかまとめて管理するような施設を希まれていました。

私の所にさえ、様々なサークルから会報などが送られて来たのですが、確かにどの冊子も労作と言え、活動の熱意の伝わるものであり、捨てるには惜しいものばかりでしたから、恐らく先生はそのような資料が失くなくなることを心配されたのでしょうか。当時とてもそんな余裕も無く、遂にいいお返事が出来なかったことが今でも心残りです。或は（勝手ながら）早川教授の施設でもお引き受

け頂けたら、泉下の先生もお喜びになるかも知れません。

折角の追悼文に雑駁なことを書かせて頂きましたが、井上英二先生、本当にいろいろ御指導有り難うございました。どうか安らかにお眠り下さい。

星飛んで 宙の一隅 暗き儘 國雄

合 掌

## 井上英二先生 東大附属の双生児研究の源流

村石 幸正（東京大学教育学部附属中等教育学校）

私が勤務している東京大学教育学部附属中等教育学校は、その名をご存じの方なら必ず「あ、双子の学校ね」と言われるくらい、「ふたごの学校」として知られています。

戦前から双生児研究班という組織で行われていた双生児研究を学校教育の場でも行うという画期的な実験校として戦後にスタートした東大附属は、これまでに 913 組の双生児を入学させてきました。

東大附属の双生児研究の特徴の一つとして、各双生児の卵性を、双生児特別検査を行うことによってきちんと判定している、ということがあります。この双生児特別検査は、現在では、血液型、いくつかの DNA 検査、血圧、身体各部の類似、身体計測、医学面接、写真撮影、という項目で行っているもので、本学医学部との連携によって連綿と行われてきたものです。

この双生児特別検査の実施に際しては、井上英二先生が中心となって始められ、検査の時期や内容などは時代とともに変わりながらも、現在に至っています。（そもそも、旧制東京高等学校を新制東京大学の附属学校として実験・研究を行うためには、医学的な立場からの協力がなければ、東大附属の双生児研究はあり得なかったわけですが）

2004 年の暮れに、井上英二先生が東大附属にお越しくださり、それまでの双生児研究のこと、東大附属との関わりなどについて、一通りお話しをしてくださるまでは、私は、自分の学校で行われている双生児研究の歴史を全く知らずに過してきました。折悪しく、私はそのお話しを直接うかがうことはできなかつたのですが、その要旨を読むと、

- ・井上先生が東大附属の双生児研究の基礎を確立された
- ・東大附属での双生児研究開始後も、大学の研究者と附属学校の教員との窓口となって、共同研究を支えてこられた
- ・研究者の意図を附属学校側に伝えて了解をとってから研究を行う、という、現在で言うところのインフォームドコンセントのめばえのスタイルを常にとられていた

ということがわかります。

その折の、井上先生のもとめの中に、「蓄積されたデータを生かさなければならぬ」とありました。現在、東大附属設立依頼連綿と蓄積されてきたすべてのデータが、電子化され、データベース化する作業が始まっています。

このことをここにご報告して、井上先生へのご報告としたいと思います。

参考：

双生児研究委員会（2005）東大附属における初期双生児研究の歴史（井上英二先生講演記録要旨）  
－双生児入学特別検査の経緯を中心に－ 東大附属論集，第48号，73-78.

## 井上英二先生を偲んで

横山 美江（大阪市立大学大学院）

井上英二先生は、ただ座っておられるだけで、後光がさしているような存在感の溢れる先生でした。井上英二先生が他界されたことは、日本の双生児研究にとって大きな痛手であると感じています。

私が双子の研究に興味を持ち始めたころ、井上先生が執筆されたご著書を拝読し、井上先生の手掛けられた立派なご研究にただただ感心していました。しかし、私が日本双生児研究学会に実際に参加し始めた時には、すでに第一線を退いておられ、井上先生から直接ご教授いただけなかったことがとても残念でした。ただ、井上先生に学会や懇親会でお目にかかったときには、井上先生のオーラに圧倒されながら、緊張気味に挨拶させていただき、いつも優しく挨拶を返して下さったことがとても嬉しかったことを今も覚えています。井上先生の素敵なお笑顔がとても印象的でした。井上先生から今も学ぶべきことがたくさんあるような気がしています。おそらく日本の双生児研究に携わる多くの研究者が、そのように感じておられることでしょう。

井上先生のようなご高名な研究者に双生児学会でお目にかかれたことがとても幸運だったと感じています。井上先生、ありがとうございました。

## 井上英二先生のご逝去を悼む

吉田 啓治（名誉会員）

井上英二先生のご逝去を悼み、謹んでご冥福をお祈り致します。

井上先生のご高名はかねがね存じあげていましたが、直接お言葉をかけて頂いたのは、1983年ロンドンにおける第4回 ICTS 会場でした。産科の分野での発表後、先生から日本でも近く双生児研究会を結成するので産科からも参加しないかとのことでした。

帰国後、東大の浅香先生の研究室で準備会の集いにお招きいただき、多くの先生方のお話を伺い、いろいろの分野での興味ある業績に大いに刺激されたことが思い出されます。

昭和62年、東大山上会館にて井上先生を会長として第1回日本双生児研究会が開催され、その後、日本双生児研究学会と改称され今日に至っています。今後、わが国における双生児研究が多方面に亘り、益々発展することを期待します。



## 編集後記

2010年10月17日、本学会と双生児研究に対して筆舌に尽くしがたいご貢献をなされた井上英二先生が、90歳の天寿を全うされました。先生ご逝去の報に際し、本学会では理事会の議を経て、「井上英二先生追悼特別号編集委員会」を結成し、ニュースレターの追悼特別号を編集することになりました。そして、井上英二先生とのご関係の深かった先生方を中心にご執筆をお願いいたしました。本追悼特別号が井上英二先生の霊を慰め、先生のご功績・学恩に十分に答えるものであればと願います。3月11日の東日本大震災などもあり、編集作業が遅れ、ようやく今日発行の運びとなりました。執筆された先生方に心よりお礼を申し上げるとともに、発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。

日本双生児研究学会ニュースレター井上英二先生追悼特別号編集委員会  
浅香昭雄、今泉洋子、早川和生、志村 恵、横山美江